「おしりから出血、痔かなと思って いたら…」

皆さんの中にも出血のご経験がある方がいらっしゃるかと思います。もしかすると、それは「直腸がん」かもしれません。食生活の欧米化などの理由から増加傾向にあります。今回は「直腸がん」についてお聞きしました。

肛門から出血がありました。あなたはどうしますか？

A 肛門からの出血に気がついたとき、まず、多くの人の頭の中に浮かぶのは〝痔なのかな〟という考えです。確かに痔疾（痔核、裂肛など）からの出血も多いのですが、肛門のすぐ奥には直腸が存在し、ここに出血の原因になるものがかくれていることもあります。憩室や腸炎など良性の疾患でも出血をきたしますがやはり〝がん〟のような悪性の疾患が存在する可能性もありますので医療機関を受診されることが大切です。

かかりつけ医を受診しました。どんな検査が行われますか？

A まず、肛門からの出血の原因を探るために、肛門の診察をします。診察台に側臥位になって（医師側に背中を向けるように横になって）肛門周囲を観察したのち、直腸指診（肛門から指を挿入し、出血や腫瘤の存在を確認）を行います。専門医ではその後、肛門鏡という器具を用いて肛門と直腸の一部を観察します。さらに必要な場合は、大腸内視鏡検査を行う場合があります。これはおもに消化器内科（内科）で行われます。また、血液検査で貧血の確認や腫瘍マーカーを測定する場合もあります。

検査で直腸がんと診断されました。どんな治療法がありますか？

A ひとくちに直腸がんといっても部位や進行度によって治療内容が異なります。大きさが小さく、深達度（がんの深さ）の浅いものは内視鏡による切除が可能です。大きさが大きくなり、深達度が深くなるとリンパ節転移の可能性も高くなり、外科的切除が必要になります。ひと昔前までは、手術といえばお腹を大きく切って行うものでしたが、最近では腹腔鏡手術といって小さな創から、お腹の中へ器具を挿入して、手術を行うことが可能になってきました。創が小さく、痛みが少ないことや身体に対する侵襲が少なく回復も早い長所があります。腹腔鏡手術には適応があるため、すべての方が受けられるわけではありませんが全国的にも徐々に増加してきています。手術以外の治療法としては、化学療法（抗がん剤治療）や放射線治療がありますが、現時点では切除可能なものは外科的切除を行っているのが現状です。

直腸がんで手術が必要と云われました。人工肛門ってどんなものですか？

A 病変が肛門にかかったり、肛門に非常に近い場合には直腸切断術といって肛門を切除する方法が一般的でした。その際には便の出口として新しく腸管をお腹へ出して肛門の役割をするようにします。これを人工肛門と呼びますが、決して人工物を用いるわけではありません。人工肛門には、永久的なものと一時的なものがあり、一時的なものは一定期間をおいて手術で閉鎖することが可能です。また、肛門に近い部位のため、以前は永久的な人工肛門が必要であった方でも、最近は内肛門括約筋切除（ＩＳＲ）といった肛門温存手術の普及により、肛門機能の温存の可能性が広がっています。

今月の先生

岐阜市民病院　外科
松井康司 先生

○専門分野
消化器外科（特に下部消化管領域）、一般外科
○役職
内視鏡外科部長
外来化学療法部副部長
○主な資格、認定
日本外科学会指導医・専門医
日本消化器外科学会指導医・専門医・消化器がん外科治療認定医
日本大腸肛門病学会指導医・専門医
○卒業年、主な職歴
平成4年岐阜大学医学部卒